

鳥木家の対話から

WEB 聴講生の鳥木英秋さん、親子で話し合いながら、間宮さんの話をきいてくださいました。ご息は、電機メーカーの研究職の仕事にしている社会人。鳥木さんはビジネスマンです。

子：講義を一緒に聴けて、過去に様々な薬害事件があったことが分かり、正しい情報を得ることができてありがたかった。

父：裁判などのたびに報道もされており、かつて製造物賠償責任や治験事故等を対象とする保険を扱う会社に勤めていた身として、しっかりと国民皆が整理しておかねばならない問題と考えながら聴いていたよ。

子：なぜ、薬害が拡大したかについても、認識を新たなものにできた。国、製薬会社など関係者の隠蔽や懈怠によって、防ぎ得た被害が拡大していたことについて、具体的な話を聞き、他の分野でも範とすべきことと、重く受け止めた。でも、なぜこうした事件が反省されず繰り返されるのだろうか？

父：ぼくも元広報マンとして、隠蔽や懈怠が結局企業にとって致命的な結末に繋がる事例をいくつも見てきた。だから、薬害の経緯も、ありそうなものと、想像に難くない。

うちの会社でも、問題が発生した時には、必ず「穏便に運べないか」という議論がある。隠蔽や懈怠は、人の心に宿る保身に由来するのだと思う。

大切なことをこの講義から身にしみた。被害者は、経営者でも株主でも社員・職員でもない。情報に最も乏しい消費者・利用者が、すべてのステークホルダーの中で最大の被害者になることを、改めて思い知った。

子：被害を受けた人々が、これまでどのような苦しみを体験してきたかについて、改めて知って心が痛んだ。

その苦しみに対し、間宮さんご自身やご家族が、事実をしっかりと受け止め、強く生きてこられた姿勢に感動した。

ただ、講師の間宮さんは、問題に立ち向かうことのできた方であり、そうではない方も多いのではないだろうか？

父：もちろん、事実を受け止められなかったり、問題に対峙する環境になかったりなどの事情で、悲惨な経緯を辿ったケースも多数あるに違いない。表に出

にくいケースについても、しっかりと認識しなければいけない。
ところで、カミングアウトというほどの話ではないが、これまできちんと話をしたことはなかったことがある。

ぼくも生まれながら片足の腱が短いという障害があり、6歳までに2度手術をし、腱を他の組織を移植することで、とりあえず形を整えてもらった経験がある。実は、今でも片足首は曲がらないが、小学生のころはリレーの補欠選手にもなり、いまゴルフも下手ながら楽しんでいる。

だけど、亡くなった私の母、つまり君の祖母が、かつて、親戚から（差別用語だが）「かたわものを生んだ」と言われ、随分苦しんだ、という話をしていたことを思い出した。

ぼくの障害の原因は不明だが、ひょっとしたら薬害なのかもしれない。あるいは君も知っている通り亡くなった母は広島市の被爆者なので、ぼくは被爆二世にあたり、その影響なのかもしれない。

この年になって原因を探る気は毛頭ないが、ぼく自身、足は速かったとはいえ、走ると、「変な走り方」とよく友人に笑われた。悪意はなかったのだろうけどね。当時は何も気にもせず笑い返していたが、今となっては、考えさせられる事象を自ら経験していたのかもしれない。自分たちも同様のことはないか、胸に手を当ててよく考えてみなければね。

子：今は、ジャーナリズムや情報化社会の進展もあり、誰もが、解決しなければならない問題に強い認識を持つようになった。それが、大きく後押ししたのかと思う。

そうはいつでも、被害を受けた人々の多大な努力があったことで、利用者・医療職・薬局・メーカー・行政が連携し、問題を早期に発見し、解決に向けていく社会システムが整備されてきたこともよく分かった。

ぼくたちとしては、どうしたらいいだろう？

父：社会を動かすまでの力はないとしたら、一人ひとり教育・啓発を重んじて、皆が問題を認識し、被害者に誰もが万が一にも差別なく接する社会に向けて、あと一歩も二歩も皆に努力が必要との認識を新たにすることだと思う。